

RNA→DNA コースの発見が教えるもの

井 尻 正 二

今年(1970年)7月15日の毎日新聞の夕刊に、つきのような見出しの記事がのっていました。
 “ガン究明に新しいカギ 米で発見” “リボ核酸が「主役」”と。

これによりますと、“これまでRNAは一般に「二級市民」に分類され、DNAの設計図に従って細胞のなかに形成され、DNAの指令を運ぶメッセンジャー・ボーイの役割を果すもの、と考えられてきた。しかし、いまやこれら科学者たちの三つの研究チームの独立した研究によって、RNAの核をもつある種のウイルスは遺伝情報の通常のパターンを逆転させる酵素または触媒を含むことがあきらかになった”としています。

なお、この発見はアメリカのガン研究所(NCI)の3つのグループでおこなわれたもので、その成果をつぎのように評価しています。“この新発見は「生命の基本的物質」に関する基礎的な考え方を修正することになる、としており、とくに今度の発見では、これまで悪性ガンの形成を含めて、形質遺伝と成長の過程を進行させる主体はDNAで、RNAはそのドレイ的役割しかしていなかった、と思われていたが、RNAがすくなくともあるばあいは、ガン形成の主人公であることがわかった”といっています。

以上の新聞報道が正確であるかどうかは、今のところ私にはわかりません。しかし、もしこのニュースに大過がなければ、これはガンの発生機序といったスケールの小さな問題ではなく、生物進化の根底にふれる重大問題をもっています。

現代の生物学の主流、とりわけアメリカ的な近代主義の生物学は、“獲得性遺伝”を頭っから否定し、ネオダーウィニズの立場を金科玉条にしていることは御承知のとおりです。その結果、獲得性遺伝はラマルクの要不要説ていどの幼稚な学説として、おおくの生物学者から冷笑され、罵倒されてきたことも周知のとおりです。

しかし、これにたいして私は、終始、獲得性遺伝の立場を守ってきました。このことは拙著・岩波新書“化石”の第Ⅲ章、とくに205ページにくわしく書いてあるので、必要なら読みなおしてほしい、と思います。

今回のRNA→DNAコースの発見は、私が205ページで予測していたことの実証のはしり以外の何物でもない、と思われます。

こうなると、幼稚な頭脳の持主は古生物学者ではなく、逆に、近代主義者の生物学者だったので

はないでしょうか。今のところ、この種の馬鹿につける薬はない、というのが私の心境です。

馬鹿はさておき、では私たちはこれからどうしたらよいでしょうか。生化学のレベル、あるいは分子生物学のレベルで、獲得性遺伝の問題が現実になった今日、古生物学者はどういうテーマをえらび、近代古生物学をどう展開していったらいいでしょうか。

これが打開できないと、次には生物学者が、“古生物学者につける薬はない”とうそぶくことでしょう。